

Title	<紹介>中川照将著 『『源氏物語』という幻想』
Author(s)	松本, 大
Citation	語文. 2015, 104, p. 72-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70960
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中川照将『源氏物語』という幻想』

松本 大

本書は、中川照将氏の初の著書である。

現代の我々は、現存する古典籍によって、古典文学作品を読むことが可能となっている。このような先人達の営為には大いに感謝すべきではあるが、現存する古典籍の見せる姿は作品成立時の姿とは限らない。従来の『源氏物語』をめぐる研究史は、往々にしてこの点を忘れがちであった。このような研究姿勢に対して疑問を投げかけ、具体的な問題提起を行ったものが、本書である。

本書で中川氏が一貫して主張していることは、原本のことは誰にも分からない、ということである。作者が作成した原本と、作者の原本を目指して作成されていった「原本」とは、全く別物である。「原本」は、作者の原本がそうであって欲しい、という人々の「願望」によって生み出されたものであり、それを原本と見なしてしまうことこそが「幻想」である、と中川氏は規定する。このような問題意識のもと、本書は三部構成で論を進める。以下、簡略ではあるがその内容を紹介する。

第一部は「現在の『源氏物語』は、かつての源氏物語と同じものではない」と題し、四本の論考を収める。現在の我々が『源氏物語』を読む際、ほとんどの場合は青表紙本を用いる。その青表紙本とは一体どのような本なのか、具体的に検証を加えている。

一般的に青表紙本は藤原定家の校合本とされるが、青表紙本という概念すらも「幻想」であることを、氏は指摘する。

第二部は「源氏物語」になれなかった『源氏物語』たち」と題し、三本の論考を収める。ここでは、注釈書・異本・梗概書の三観点から、現在では見られることの出来なくなった物語世界を浮かび上がらせている。現代の我々が見る物語世界が、ある一面でしかないことを的確に示すものである。

第三部は「源氏」研究の方程式と、「寢覚」研究の方程式」と題し、三本の論考を収める。氏がこれまでに行ってきた「源氏物語」研究の手法を、『寢覚物語』に応用したものである。「寢覚物語」は、原作本と改作本という二系統に分類され、原作本から改作本へと変化していったものと捉えられてきた。氏は、この構図に収まらない点を指摘した上で、従来の前提を問い直す。その上で、それぞれの系統について、それぞれの作成背景・享受世界を踏まえるべきことを提唱する。

氏は、決して「幻想」に対して否定的な立場ではない。「幻想」であることを踏まえた上で、そこから新たな文学研究の方法を切り拓こうとしているのである。近年の中古文学研究をめぐる動向を俯瞰してみると、作品享受に関してようやく関心の目が向けられ始めた状況と言える。これまでの作品研究を根底から考え直す際に、その嚆矢たるべき本書の果たす役割は少なくない。

(勉誠出版、二〇一四年十月、三二六頁、六、〇〇〇円＋税)

(まつもと・おおき 奈良大学講師)